北海道民間説話（注１）の研究（その５）

北海道の義経伝説の考察

阿部敏夫

目　次

はじめに―北海道の義経伝説へのアプローチ―
第一章　義経伝説の成長
第二章　時代における義経伝説
第三章　北海道の義経伝説
第四章　義経ジンギスカン説
おわりに
北海道内の地域別伝説分布表（１）
北海道内の人物・事物別伝説分布表（２）
謝辞
注
引用・参考文献

はじめに―北海道の義経伝説へのアプローチ―

義経伝説は、悲劇の武将源義経とその主従に対する庶民の追慕、憧憬、同情という内容を含んだ伝説である。伝説は源義経の生涯にまつわる伝説で、幼少期の鞍馬山・少年期の奥州での伝説、青年期の挙兵と華々しい戦闘という栄光の伝説、壇ノ浦後から衣川の自刃までの悲劇の伝説、そして義経生存（奥州・蝦夷地・成吉思汗）の伝説の四つに大別される。幼少期から衣川自刃までは歴史的「事実」として語られ、その事実の「誇張」などが文学・浄瑠璃・能・浪花節などの大衆芸能の中で、室町・江戸時代以降「栄光」の英雄ロマン伝説として語られた。その影響は現在まで続いている。特に明治以降「尋常高等小学校の国語読本・唱歌」（注２）に採用されたことは、日本人の心性に深く関わることになる。

キーワード…英雄不死説・義経伝説伝承地・義経ジンギスカン説

一方、「悲劇」の英雄として、兄との面会が叶わなかった腰越伝説から東下り伝説、そして、義経は衣川で自刃しなかったという「北行伝説」が室町・江戸時代から語られるようになった。特に江戸時代末期から明治初期、大正末期に喧伝されるようになる。そして、太平洋戦争を経て、現在まで中断することなく民間説話、文学、芸能などの中で義経生存伝説が語られる。

従って、義経伝説は、基本的には「栄光」「悲劇」という二項対立の構造を持って、さまざまな要素を含んで伝承されていることになる。特に、政治利用という時代的影響を色濃く受けた伝説である。

本稿では「義経伝説の現代」をキーワードにして、太平洋戦争以後の源義経伝説についての動きと北海道に伝承されている一一〇ケ所以上の義経伝説を通して考えられる問題を探って見たい。

第一章　義経伝説の成長

源義経生存伝説は、次の鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』の記述の否定から始まる。

○卅日己未。今日。於二陸奥国一。泰衡襲二源豫州一。是且任二勅定一。且依二一品仰一也。与州在二民部少輔基成朝臣衣河舘一。泰衡従二兵数百騎一。馳二至其所一合戦。与州家人等雖二相防一。悉以敗績。豫州入二持佛堂一。先害二妻廿二歳。子一。女子四歳。次自殺云々。前伊豫守従五位下源朝臣義経。改二義行一。又義顕。年卅一。（後略）

（二）

源義経は一一八九年（文治五）閏四月三〇日三一歳の時、藤原泰衡の従兵に攻められ、妻（二二歳）娘（四歳）とともに衣川で自刃したと『吾妻鏡』には記載されている。しかし、死後当初から自刃から鎌倉幕府の首実検までの不自然な日程、義経の身代わり説などから、義経は生存しているのだ（英雄不死）（注3）というわさがささやかれていた。江戸時代中期頃から義経はアイヌ民族に神として崇められて、蝦夷のどこかで生存していると言われるようにもなった。それから三〇〇年間義経生存説が時代の影響を受けながら今日至っている。

○江戸・正徳年代（一七一二）、義経は衣川で死なず蝦夷地に逃れる。義経はアイヌ民族の文化神オキクルミとして崇められて生存している。子孫はアイヌ民族の棟梁となっている。

○江戸・享保年代（一七一七）、義経は蝦夷地に逃れた後、韃靼（中国東北部）を支配していた金国に入り、皇帝章宗に厚遇された。そして、子孫も栄えた。

○江戸・天明年代（一七八三）、義経は蝦夷地から韃靼に渡り、子孫も栄え、やがて「清国」を建てた。

○明治・一〇年代（一八八五）、義経は蝦夷地から韃靼を経てモンゴルに入り、成吉思汗となった。

○大正一〇年代（一九二四）、義経＝成吉思汗説が喧伝された。

○昭和三〇年代（一九五八）、高木彬光『成吉思汗の秘密』を始めとしてたくさんの人達が源義経について論じ、小説にも書かれて空前のブームを作った。そのブームはテレビ放映をも含めて現在まで続いている。（注4）

源義経伝説には、衣川から岩手県遠野、宮古、青森県八戸、三厩、竜飛岬を通って蝦夷地（北海道）に義経主従は渡ったという話（入夷伝説）がある。一説には秋田、深浦を通って蝦夷地に渡ったというのもある（注5）。

無類の強さを持つ源義経が衣川で死ぬはずはない。北に逃れて今も生きている、生きていて欲しいという祈り、願望が庶民の心の中にあっての伝説の継承である。

第二章　現代における義経伝説

太平洋戦争以後、刊行された主な書籍の発行年・作者・題名（論文は除く）を列挙すると次のようになる。義経伝説への人々の関心の高さを見ることが出来るし、同時に現代における義経伝説の動向を大まかに理解することが出来る。

○一九五七年（昭和三二）佐々木勝三『義経は生きていた』
○一九六六年（昭和四一）大佛次郎『義経の周囲』
○一九六八年（昭和四三）司馬遼太郎『義経』
○一九七〇年（昭和四五）佐々木勝三・大町北造『源義経蝦夷亡命追跡の記上巻』
○一九七二年（昭和四七）佐々木勝三・樋口忠次郎・大町北造『源義経蝦夷亡命追跡の記下巻』
○一九七三年（昭和四八）高木彬光『成吉思汗の秘密』
○一九八一年（昭和五六）斧二三夫『北海道の義経伝説』
○一九八二年（昭和五七）長部日出雄『源義経』
○一九八三年（昭和五八）北嶋兼太郎『義経さんの行方―義経神社の由来―』
○一九八六年（昭和六一）本多貢『なぜ義経がジンギスカンになるのか』
同　佐々木勝三・大町北造・横田正二『義経伝説の謎』
○一九八九年（平成元）井沢元彦『義経はここにいる』
○一九九一年（平成三）黒板勝美『義経伝』
○一九九二年（平成四）荒巻義雄『義経埋宝伝説の謎を追え！』
○一九九三年（平成五）荒巻義雄・合田一道『義経伝説推理行』
○一九九四年（平成六）中津文彦『消えた義経』
○二〇〇一年（平成一三）平取町義経を詠む会『カムイ義経　びらとり義経物語』
○二〇〇二年（平成一四）丘　英夫『新ジンギスカンの謎』
同　小金沢昇司・歌『義経伝説』
○二〇〇四年（平成一六）保立道久『義経の登場』
同　宮尾登美子『義経』
○二〇〇五年（平成一七）近藤好和『源義経―後代の佳名を貽す者か―』
同　角川源義・高田実『源義経』
同　保立道久『義経北行上、下』
同　森村宗冬『義経伝説と日本人』
同　小島毅『義経と東アジア』
○二〇〇七年（平成一九）元木泰雄『源義経』

また、これらの書籍の副題やキャッチコピーは以下のようになっている。さまざまな視点から義経伝説が考察されていることがわかる。「判官義経の生成」「その生涯と失脚の真相に迫る」「連続殺人事件と『義経』の謎　義経伝説と金色堂の秘密に挑戦」「北行伝説の謎に迫る」「悲劇の武将は庶民によって英雄になった」「天才プレーヤが政治に敗れ去る悲劇」「数奇な運命と武士道精神」「家族愛」「現代社会の人間関係に模して」「王権論の視座から」「日本語を知っていたジンギスカン・・・正体は?」「東アジアの視点から」「まちづくりの視点から」となっている。

義経伝説そのものの考察から、東アジアという広い視野から考察しようとするものまである。それだけ他の伝説とは異なる性質を持っているということが出来る。

第三章　北海道の義経伝説

北海道内の義経伝説伝承地は、函館から乙部までの北海道南部沿岸（一九話）、島牧から稚内までの日本海沿岸（三六話）、椴法華・南茅部・洞爺湖・平取・十勝・釧路までの太平洋沿岸（三二話）、斜里町・知床半島沿岸（七話）、恵庭・札幌・芦別・旭川などの内陸部（一六話）というように北海道全地域一一〇ヶ所以上に義経伝説が伝承されている。

その伝承内容は義経（八三話）、弁慶（二四話）に関する伝説が圧倒的に多い。静御前（乙部・姫川）、弁慶の妹（知床半島）の話まで登場している。事物・動植物・人物等は七〇ほどの多岐にわたっている。詳細は、本稿の最後に図表化（1）した。地域的な特徴は次の通りである。

（四）

津軽海峡・日本海沿岸では、蝦夷地への渡海話、アイヌの娘との恋と悲しい別れにまつわる話があり、また、沿岸の地形、自然に合わせた地名伝説も多い。太平洋沿岸では、義経がアイヌの巻物を奪う話や漁業・農業の仕方を教える話がある。知床半島では弁慶とその妹も登場して大蛇を退治するという話もある。内陸部の話では、再起を期しての埋蔵金の話などがある。本州東北地方の話の足跡はほぼ明確であるが、北海道の足跡は分散しているという特徴も持っている。詳細は、本稿の最後に図表化（2）した。

その理由は厳しい条件下で生活する移住者の現実と悲劇の英雄源義経へのロマンとの裏腹の関係にある。また、伝統に縛られない新天地への想いが伝説を創り出す素地があったためである。為政者の政治的意図があったとしても移住者である庶民が北前船などの交易を通して伝えられる江戸の庶民文化を受け入れ、そして、その伝説を素地に伝説がさらに創作されていったのではないかと考えられる。昭和期に入ると河川・橋を守る治安の神、北海道開拓の神として祀られたり（南幌・上砂川など）、義経ロマンを通して町おこし（本別）の役目を担うようになる。

特徴的な義経伝説を三つ紹介する。

○弁慶とその妹―知床半島には、「アシクネシュマ（五ッ岩）」―サマイクル（弁慶）が大マムシと争った時、応援にかけつけた神々がそのまま岩になってしまいました。「カムイパ（魔神―

大蝮蛇―の頭)」―今は獅子岩と言います。海中に突き出た岩の形から名付けられました。昔、弁慶の妹が山からおりてきたところ、このあたりに住むトッコカムイ（大マムシ）がのみこもうとして追ってきたが、サマイクル―弁慶―に踏みつぶされて岩になったと言います。一説にはオオカミであるとも言います。「ピヤラオマイ（窓のある所）」―今の眼鏡岩。弁慶が大マムシを踏みつぶした時、妹がこの穴から見ていたという伝説が伝承されています。（斜里町立博物館協力会『知床半島西岸の地名と伝説』）

○本別の義経伝説―本別アイヌの古老清川ネウシヤルモンが語ったとする義経伝説は、文化神サマイクルが十二匹のオオカミを従えて本別にやってきました、サマイクルは義経様だという話です。そして、サマイクル・カムイ・サンテ（サマイクル神の乾し棚）と呼んでいた山を義経山としたということです。この伝説を「創造する伝説」としての義経伝説ととらえ、「義経の里づくり」という街づくりとして位置づけられていくことになります。本別町文化協会、本別町広報「ほんべつ」、新聞社、企業とが連携して本別山渓一帯を観光資源として義経伝説を創造することになります。（本多貢『なぜ義経がジンギスカンになるか』）

○義経とアイヌ文字―アイヌは義経をばヨシツネカムイと称し、建築法、器具の製法使用法、殊に熊狩について秘法を伝授した神として崇拝している。此義経が、或日の事、アイヌの大酋長の許を訪れた。生憎酋長は狩猟に出ゐて、彼の秘蔵の一人娘が留守をしていた。これを見て義経大いに悦んで『娘に自分は色々な魔法を使う事を知っているが、貴方の父上には到底及ばない。ついてはどうか其秘蔵せられてゐる魔法の書物一巻を拝見させてもらいたい』と頼んだ。彼女は父が不在だからと言ってことはったが、義経がいろいろと嘆願したので、彼女はとうとう否みかねて『ではここで御覧なさい。そして見たらすぐかへして下さいよ』と承知をして、奥より父の秘蔵の一巻を持出して来て、義経に渡した。彼はうやうやしく受取、それを一覧する様な振をしてゐたが、娘の隙を見るや、それを手にして戸外に逃れ、海邊伝いに一散に走った。娘は女の足の事とて、到底彼に追い付く事が出来ないのを悟り、唯泣き悲しむより他はなかった。一方山に狩に行った酋長は鳥の鳴き声によって留守中に何か変事が起こった事を知り、急いで帰って見れば、すでに義経は秘蔵の一巻を盗み出してはるか沖の方へ乗り出していた。酋長は直に小舟を擁して義経を追った。所が酋長の舟は一櫂こげば千里を走ると言う舟であったので、たちまちにして義経に追ひ付かうとした。義経は魔法を以って海に山を作って酋長を遮った。而し酋長は少しも恐れず舟より下りて追いかけ又もや義経を捕え様とした。義経は今度は酋長の眼前に大沼を作った。酋長は水上を歩み得る草履をはいて追った。それで義経は断崖絶壁を作った。こうしてゐる中に遂に義経の行方を見失なった。此時義経が持ち去った魔法の一巻とは即ちアイヌの文字の総てを記載した宝物であった。其後ついに其行方は不明になり、為

（五）

に今日のアイヌには文字と言うものがなくなったと言う。（満岡伸一『アイヌの足跡』）

以上までは北海道内に伝承されている状況を「共時的」に考察した結果である。

次に、「通時的」に北海道の義経伝説を研究することが必要である。この研究は今後の大きな課題である。

この研究の考察のために、平山裕人 一九九六「アイヌの義経伝承」『アイヌ史を見つめて』一三四―一四〇頁　の論説が示唆を与えるので論説の概要を紹介したい。

平山裕人は「義経伝承がアイヌのなかにどのように作られていったか、調べることにする。」という課題意識で論説している。

中世から近世にかけて読まれた御伽草子「御曹司島渡」の話と一七一〇『蝦夷談筆記』の話との類似を通して、先行作品の御伽草子の影響を指摘している。上記の作品から義経のアイヌの首長に婿入りする伝承は一七世紀なかばだけの現象である。背景には「シャクシャインの戦い」が関わっていたらしい。義経がアイヌにさまざまな文化を伝えたという文化神（オキクルミとの結びつき）伝承は、「シャクシャインの戦い」後に成立した伝承であろうと指摘している。もちろん婿入り型・文化神型伝承はセットになって伝承され、松前藩が政治利用したとみられると論説している。ところが義経崇拝の現象は、一八世紀なかばまで続いていた（あるいは強制されていた）が、その後の地名由来伝承は文化神型の残影であるとしている。

（六）

平山裕人は「まとめ」で次のように述べている。

シャクシャインの戦いは、松前藩とその背景にある幕藩体制の力で制圧された。それは、アイヌの軍事的敗北であったわけである。ところが松前藩は、軍事的勝利だけでは安心できなかった。アイヌが二度とこのような戦いを起さないように、価値観の強制をせまった。それが、義経伝承の押し付けだったと考えられる。アイヌに、さまざまな文化を与えたという文化神オキクルミ。それは実は義経だった。つまり、日本人がアイヌに文化を与えたのだ。こういう価値観を押しつけることで、松前藩は精神的優位に立とうとしたと見られる。つまり、アイヌの義経伝承は、日本人のアイヌモシリ侵略の精神的支柱としてとらえるべきだろう。

私は平山裕人の指摘で、北海道内の義経伝説を見ると近世以降本州と交流のあった津軽海峡・日本海・太平洋各沿岸は少なくても近世以後の庶民に流布された義経伝説の跡（地域別伝説分布表（1）参照）を見ることが出来る。幕藩体制・松前藩は政治利用をしたであろう。

また、近代になり、特に日露戦争以後大陸に日本が眼を向けた時から北海道の義経伝説、義経ジンギスカン説が喧伝されるようになった。それは近世から伝承されていた義経蝦夷地、大陸北行説、ジンギスカン説が素地になって伝説が増幅して行ったのでは

ないかと考えられる。

そして、現代になり、観光づくり・まちづくりにも利用されて行く。義経ロマン伝説はさらに強調されて現在まで伝承されていくことになる。もちろん、さまざまな時代背景によって生み出された伝説要素が複合しながら伝承されている。

第四章　義経ジンギスカン説

九郎判官源義経は蝦夷地から大陸に渡った（義経ジンギスカン説）とも言われている。現在の北海道の寿都・弁慶岬から大陸へ、稚内からサハリンを経て大陸へ、知床半島・国後島を経てサハリン、大陸へという三つのルートがあると言われている。

義経ジンギスカン説の時代背景については前述したが、特に太平洋戦争以前は小谷部全一郎の「成吉思汗・源義経説」が国策とも関連して大きな影響を日本人に与えた。

小谷部全一郎（注６）は、一九二四年に『成吉思汗ハ源義経也』を刊行した。「源義経は衣川では死んでいない。平泉から蝦夷地に脱出した後、中国大陸に渡り、成吉思汗となった」というものである。小谷部は刊行の理由を次のように述べている。

「先輩諸賢の『義経衣川自刃説』に対して反駁する言葉に少々不遜の傾向があるのは、詰るところ苦心研鑽して大陸に義経復興の事跡が明確に残っているのを認めたためである。その上、鎌倉にもたらされた『義経が衣川で自害した』との報せは、藤原泰衡らの苦肉の策から出た事実無根の上申であることに思い及ばず、鎌倉側では真実と思いこんで『吾妻鏡』に記して以来七百余年間、ほとんどの学者が定論としてきた。本書は『義経は衣川で死んだ』とする千古の史疑を払拭し、不遇の英雄に真実の光を当てようと思う誠の心から出たものである」（原文を意訳し、仮名遣いは現代仮名遣いに直した）

すなわち、「苦心研鑽して大陸に義経復興の跡が明確に残っているのを認めたためである」と述べている。軍属の通訳官として見聞したことがその根拠になっている。

以上のような小谷部の説が当時からその信憑性が問題になったが、国民の中では義経ブームを起こした。

そして太平洋戦争後の一九五〇年代頃から佐々木勝三・樋口忠次郎・大町北造・横田正二（注７）などの尽力の影響もあって義経生存説、ジンギスカン説が継承されて今日まで来ている。もちろん現代においても高倉新一郎、佐藤直太郎、吉田巌、菊池勇夫、須藤隆仙、平山裕人などの厳しい反論（注８）がある。大正末期の中島利一郎、金田一京助、島津久基等の歴史学、アイヌ語、日本文学などの研究者の厳しい指摘（注９）の言説がその基礎になっている。

おわりに

義経伝説は、和人のアイヌ民族との接触・支配（江戸幕府の蝦夷地内国化政策）、日本の大陸進出という時代背景を持って伝承され

（七）

た。そのことは北海道で語られている平取のアイヌの巻物を奪う話や釧路地方のオキキリマイ（泥棒野郎）、寿都・弁慶岬などに伝承されている伝説から考察される。また、時代の変革期における庶民の不安との共鳴（憧憬・同情・追慕の感情）がある。源義経の武将としての華々しい活躍（一の谷・壇ノ浦の合戦の逸話など）後のあまりにも悲劇的な末路が義経生存説・ジンギスカン説を助長・膨張させたのだろう。そして、北海道に義経伝説が多いのは、新天地の「蝦夷地・北海道」の厳しい自然条件下での本州からの移住者の生活・心情に、義経ロマン伝説を受け入れる素地があったと考えられる。庶民は文学や芸能、語りを通して子孫に英雄伝説を伝える。それらの活動が義経伝説の伝承をさらに豊かに創造して行った。時には、

（八）

神社の絵馬の奉納を通して伝説が語り継がれた（三笠・幌内神社、網走・鱒浦神社など）。また、北海道最初の列車名は義経号・弁慶号・しづか（静）号（注１０）である。英雄伝説は庶民のあらゆる生活の場面に登場する。

今後の課題は、北海道内一一〇ケ所の伝承地調査、記録等をもとにしてまとめられた「書承」の義経伝説の形成過程を論究することである。

因みに、義経伝説の背景に政治的意図を持たない庶民の自由な「判官びいき」で、北海道内の一一〇ケ所以上の義経伝説の再創造を願う。

北海道内の地域別伝説分布表（1）

地区	市町村	主人公	事物	項目	内容
北海道南部沿岸（旧和人地区）	函館	義経	神社	1 船魂神社	義経が津軽海峡を渡るとき、船魂明神に祈願すると風が止んだ。
		義経	不動尊	2 波分不動尊	義経が難破したとき、不動尊が船の舳先に立ち、波をかき分けて船を助けた。
		義経	松	3 腰掛の松	義経が函館に来た際に腰掛けた松。
		弁慶	石	4 足跡	函館八幡宮にある弁慶の足跡のついた石。
	松前	義経	海	5 渡海	
		義経	石	6 義経石	義経が本道に渡る時、阿弥陀仏に無事着岸を祈願し、その恩に阿弥陀仏千体を刻んで、庵に安置した。
		義経	山	7 地蔵山	義経が山に自分の像を彫刻して納めて、それが地蔵と呼ばれ、地蔵山となった。
		義経	寺	8 海渡山阿吽寺	義経が建立した寺。
		義経・弁慶	岩	9 将軍山と義経・弁慶	弁慶が背負った岩、義経が足駄を履いて歩いた跡のある岩が将軍山にある。
		義経	岬	10 矢越岬の遠矢	義経一行が、渡海を妨げる魔物を退治するために矢を射って海路を開いた。
		義経	櫂	11 車櫂を用いた	義経が長刀を櫂の代わりに使って八面大王から逃げた。
		弁慶	証文	12 借用証文	「大豆五斗借用」という弁慶の書名がある証文が、松前旧家に残っている。
		義経	歌謡	13 追分伝説	義経に心を寄せたフミキが死んだ跡に咲いた草の音色から江差追分が誕生した。

（九）

（一〇）

地区	市町村	主人公	事物	項目	内容
	松前	義経	岩	14 馬岩	義経がアイヌに追われた時に乗っていた白馬が死んで化石となった。
		弁慶	岩場	15 足跡	馬岩の後に、草鞋で踏んだような跡がある。
	江差	弁慶	岩屋	16 巻物を隠した岩屋	弁慶が義経から預かった「六韜三略」という巻物を岩窟に隠した。
	奥尻	義経	島	17 奥尻誕生	義経がアイヌの長から逃げる時、巻物の魔法で島を作って逃げた。その島が、奥尻となった。
	乙部	静御前	川	18 姫川伝説	義経を追ってきた静御前が乙部の川のほとりで病に倒れた。そのため、姫川という地名がついた。
		義経	山	19 九郎岳	義経が追手から逃げる時に踏み分けて越えた山。
日本海沿岸	島牧	義経主従	岩	20 神威岩	義経主従が島牧の浜に入った時、チャレンカムイ岬の突端が二つに割れて、船を見守るように屹立した。
	寿都	弁慶	岬	21 弁慶岬	弁慶と義経が異邦に渡ったところ。弁慶が具足を干したとも言われる。
		弁慶	土地	22 土俵	義経を弁慶が相撲をとった跡。弁慶が尻餅を着いた跡がある。
		義経	小山	23 物見台	義経が物見をした小山。
		弁慶	岩、森	24 糠岩、糠森	弁慶が土俵を作った時、積んでおいた糠が岩になったのを糠岩という。また、このあたりを糠森、あるいは弁慶の粟畑という。
		義経	徳利	25 黄金の徳利	糠森から出土した徳利。義経らが埋めたもの。
	岩内	弁慶	岩	26 刀掛岩	弁慶は岩を捻って刀掛を作って休んだ。
		義経	岬	27 雷電岬	義経が巻物を盗んで逃げた。その時、来年また来ると言ったので来年岬と言うようになった。
		弁慶	岩	28 薪積岩	弁慶の背負った薪が岩になった。刀掛岩の近く。

地区	市町村	主人公	事物	項目	内容
日本海沿岸	岩内	義経	石	29　笹竜胆紋石	義経が、源氏の家紋である笹竜胆を掘って立ち去った。
	泊村	村長	岩	30　兜岩	義経の兜の存在を知らせるために、村長の顔が岩に現われた。
	積丹	義経	岩	31　神威岩	義経が岬の立岩に奉斉して難を逃れた。義経が烏帽子を立岩に投げ掛けて難風から逃れた。
		メノコ	岩	32　メノコ岩	義経が去ってしまい、悲しみの余り岬より飛び込んで化石になった。
		メノコ	岬	33　神威岬とメノコの投身	義経が船出する時、和人の女を連れていたので、怒り狂ったシャレンカはカムイ岬から身を投げた
		義経	神社	34　神威神社	義経が海上の安全を神威岩に祈願したので神威神社ができた。
		弁慶	野原	35　一夜の野	弁慶が畑を作ったところ。神威岬の脇の野原。
		義経	岩	36　女郎岩	義経を追って岬に向かうシララの体が岩と化した。
		義経	洞窟	37　美国の宝島	義経が洞窟のどこかに宝物を隠した。
	古平	義経	岩	38　セタカムイ岩	義経が大陸に渡る時、連れていた犬が吼えている岩。
	余市	義経	墓	39　墓	豊浜町の山岳部に二重ねの墓石と思われる自然岩がある。
	小樽	フミキ	花	40　赤岩のフミキ草	義経に残されたフミキが、断崖から飛び降りた。その場所に、一輪の美しい花が咲いていた。
		フミキ	蛇	41　赤岩の白蛇	祝津近くの赤岩の洞窟にフミキの精霊である白蛇が棲んでいる。
		静	救助	42　雪中の義経・弁慶を救う	北方を目指していた義経・弁慶主従が、張碓と銭函の間で大雪のため立往生していたのを静が駆けつけて救出した。
	石狩	スワロ	花	43　石狩のハマナス	スワロが義経との別れの際に、ハマナスの花を贈った。

（一一）

（一二二）

地区	市町村	主人公	事物	項目	内容
日本海沿岸	厚田	義経	岩	44 涙岩	義経が静御前を偲んで流した涙が岩になった。
	浜益	義経	地名	45 飯を炊く	義経が飯を炊いたため、そのアイヌ語から地名がついて浜益になった。
		義経	社	46 義経像と海尊の長刀	義経の像と常陸坊海尊の長刀を納めた社をアイヌは神として崇めた。
		義経	燕	47 岩燕伝説	義経を思い服毒した娘の岩燕が、今も雄冬の断崖に住んでいるという。
		義経	料理	48 アイヌにご馳走になる	マラプトフンナイに到着した義経はアイヌからトドを馳走になった。
		義経	山	49 黄金山	義経が住んだ山。義経の甲冑がマムシになったと言われる。
		義経	岩	50 カムイチプトイ	カムイは義経、チプは船、トイは上ったという意味。義経は浜益から増毛に向かった。
	増毛	メノコ	メノコ	51 雄冬峠の怪力メノコ	義経は魔法の巻物をメノコからとり上げて、魔法を使えなくした。
		義経	岬	52 カムイチャシ	神の城跡という意味。義経が山越えして降りてきたところ。
		弁慶	岬	53 カメツボシ岬	弁慶が住んでいた岬。本願寺の上人が弁慶に追われてつけた下駄の跡が残っている。
	稚内	義経	岩	54 試し切りの岩	義経が試し切りした岩があった。今は国道の開削のためない。
		義経	場所	55 ゆかりの地	義経が樺太に渡るとき、匿われたところ。宗谷村泊内
太平洋沿岸	椴法華	義経	岩	56 神鬼の立岩	アイヌが義経を追った時、義経が立岩に隠れていたのを見て驚いて逃げた。

地区	市町村	主人公	事物	項目	内容
太平洋沿岸	南茅部	義経	岩	57 屋形岩	大滝の滝の上にあるヒグマの古穴の左手に義経の屋形岩がある。少し離れて、兜岩もある。
		義経	椀	58 義経の椀	義経が水を汲んで飲んでいた椀が、波に打ち寄せられて流れ着いた。
	洞爺	義経	岩山	59 義経岩	手負いの義経が逃げ込み、観世音菩薩に助けられた山。周辺の湖岸の石が朱色なのは、傷や血刀を洗ったから。
		義経・村長	村長	60 キムンド伝説	満州人であるキムンドは義経に満州の情報を流さなかった。
	白老	義経	浄瑠璃	61 蝦夷浄瑠璃	義経がアイヌの魔法の巻物を持って逃げ去った。そのため、アイヌの文字が無くなった。
	厚真	義経	徳利	62 義経とトックリ	義経のトックリを壊したために、山が噴火して畑を埋め尽くした。
		義経	場所	63 逗留地	義経が厚真川すじの村長の家に滞留して、彼等を伴って西へ赴いた。
	平取	義経	神社	64 義経神社	義経の木像を奉った神社がある。
		義経	木	65 義経神社の栗の木	樹齢四五〇年の栗の巨木。アイヌ人が義経を慕って神木としていた木。
		義経	巻物	66 魔法の巻物	義経がアイヌの魔法の巻物を盗って逃げた。それ以来、アイヌに文字が無くなった。
		義経・弁慶	鳥	67 金色の鷲	義経と弁慶はカニチカツフという金色の鷲を追いかけてカムサッカの海口まできた。
		義経	住居	68 砦跡	義経は平取の参上にハイという魚の鼻突を立てて、住居を構えた。
		義経	峠	69 義経峠	義経一行が新冠から沙流に行く時に、越えた峠。

（一三）

（一四）

地区	市町村	主人公	事物	項目	内容
太平洋沿岸		義経	宝	70 魔法の宝物	義経はアイヌの宝物を持って逃げた。
	鵡川	義経	魚釣り	71 魚釣り場	キキロイに義経が魚を釣り幣を立てた所がある。
	門別	義経	岬	72 義経岬	シノダイの岬の泉で義経が渇きを癒したため義経岬に。
	新冠	義経	館	73 判官館	義経が新冠川口に館を築いたが、兵力が足りないため平取に去った。
		メノコ	花	74 判官館のハマナス	義経に恋をしたピリカメノコが投身自殺した。その砂浜に咲くハマナスはメノコの血と涙の色である。
		義経	館	75 判官館のトンネル	判官館のトンネルの家にアイヌの娘家族と住んでいた義経は、目の見えないフリをして宝物を盗って平取に逃げた。
	えりも	義経	岬	76 襟裳岬出現	義経がアイヌの秘法を奪って逃げる際、巻物で作った山が襟裳岬のエリモンツペである。
	大樹	義経	地名	77 義経の矢	アヨボシュマは義経が射た矢が溜まった所が地名の由来。
	豊頃	義経	場所	78 上陸地	湧洞沼近くの土手は義経が上陸した時の船である。その上に縄を巻いた小山もある。
		義経・弁慶	岬	79 義経岬・弁慶岬	アイヌとの戦いの時、義経が山側の岬を通ったので義経岬、弁慶は海側の岬を通ったので弁慶岬となった。
	白糠	義経	跡	80 尻餅跡	義経が射殺したクジラを焼いている時、油が串に落ちて焼けたのに驚いた義経が尻餅をついた。その土地が凹んでオショロコツとなった。
		義経	木	81 一本のトドマツ	オショロコツの海岸に刺さった義経の矢に根がついて一本だけ孤立したトドマツに成長した。
	釧路	義経・弁慶	場所	82 弓勢競争	知人岬にチャシを築いた。ここから、弓勢を競って西に向かった。
		義経	岩	83 窓岩	知人岬で義経が弁慶と弓勢競争をした時、大岩に穴を空けた。この穴から船の往来を眺める景色がいいので窓岩。

地区	市町村	主人公	事物	項目	内容
太平洋沿岸	釧路	義経	船	84 義経の船	知人岬に船形の窪地があり、アイヌは義経の船だと言って小便などをすると罰が当ると禁じられている。
		義経	橋	85 知人岬の神橋	知人岬灯台下にある二列の岩は、義経が十勝の岬に橋を掛けようとして打った杭の跡。
		義経・弁慶	土俵	86 千代の浦の土俵	千代の浦にあった円形に浮き出ている場所は、義経と弁慶が相撲をしたところ。
		義経	木	87 春採湖畔の一本松	春採湖南岸にあるトドマツは、義経が知人岬から射った矢。
知床半島沿岸	斜里	弁慶	岩	88 蛇頭岩	弁慶の妹を呑もうとした大蛇を弁慶が踏み潰すと大蛇が岩になった。知床岳裾の海岸にある岩。
		弁慶	岩	89 五つ岩	弁慶が大蛇と戦った時、神達が加勢に駆けつけ、そのまま五本の岩になった。蛇頭岩傍らにある。
		義経	岩	90 烽火台	義経が軍勢を集めて烽火を上げたところ。
		義経	場所	91 陣幕張	義経が合戦の時陣幕を張ったところで、その跡が土塁の形になったといわれている。
		義経	岩	92 避難地	義経の船が遭難した時、沈んだ船底が岩になった。これは、弁財崎のトッカリ岩だと思われる。
		義経・弁慶	岩	93 串の化石	ポロモイの西端にある柱状節理は、義経が魚を焼いた串の残り。弁慶も此処で魚を焼いた。
	羅臼	義経	岩	94 尻餅岩	義経がクジラを焼いている時、串が折れて驚いて尻餅をついた岩。
内陸部	恵庭	義経	宝	95 恵庭岳の埋蔵金	義経は千歳川支流のシママップから入った熊の沢に黄金を埋めた。
	札幌	義経	石・宝	96 義経石と埋蔵金	義経は再起のために石狩山中に埋蔵金を埋めた。そして、目印に「よしつねいし」という岩石を置いた。

（一五）

（一六）

地区	市町村	主人公	事物	項目	内容
内陸部	南幌	義経	神社	97　義経神社	一九三六年、治水の神として平取町義経神社に分霊を請い、義経神社を建立した。
	上砂川	義経・弁慶	橋	98　義経橋・弁慶橋	道路開削の際、幌内鉄道の機関車「義経号」「弁慶号」に因んで付けられた。
	旭川	義経	丘	99　義経台	和人が「義経台」と呼んでいた小高い丘。アイヌはこの丘で宴を閉める際「ギケイコー」と言うが、これは義経のことばだと伝えられている。
		義経	岩	100　義経岩	神意古譚にあるアイヌの文化神サマイクルの居城遺跡。今は義経岩と呼ばれている。
	東神楽	義経	場所	101　義経台	東神楽にある平坦な草地台地。義経とアイヌ達が酒を酌み交わしたところ。アイヌは義経をギケイコウと呼んだ。
	美瑛	少女	子孫	102　大雪山の義経	ユナミという少女が白蛇の精と交わった。この少女は義経が随って来た奥州の婦人の子孫と言われる。
	音威子府	弁慶	橋	103　弁慶橋	国道四〇号線のペンケサックル川に架かる橋。
	天塩	弁慶	橋	104　弁慶橋	国道四〇号線のタツネウシ川に架かる橋。
	新得	義経	峠	105　狩勝峠の義経	義経と弁慶が石狩と十勝の国境で、十勝平原を眺めながら「好い国だな」といったという。
	本別	義経	山	106　源氏山	源氏山という山があり、義経が来たという説がある。
	中札内	弁慶	跡	107　弁慶の尻餅跡	弁慶がアイヌと一緒にクジラを焼いている時、突然火が爆発したのに驚いた弁慶が尻餅をついて丘陵が凹んだ。
	弟子屈	義経	石	108　義経石	弟子屈湖にあった義経石にアイヌが小便をかけると、石は湖中に沈み湖が荒れた。そのアイヌが入水すると、湖は治まった。
	標茶	義経・弁慶	岩	109　ペンケとパンケ	義経と弁慶の力競べをした時、義経が滝の上まで投げたのがペンケ岩、弁慶が下に落としたのがパンケ岩。
		義経	松	110　シラルトル湖の二本松	義経がシラルトル湖で弁当を食べた時に使った箸を突き刺して置いた所、根がついて日本のトドマツになった。

北海道内の人物・事物別伝説分布表（2）

	道南地区	日本海沿岸	太平洋沿岸	知床半島沿岸	内陸部	合計
話数	19	36	32	7	16	110
《人物》						
義経	14	20	31	5	12	82
弁慶	5	7	4	3	5	24
静御前	1	1	0	0	0	2
弁慶の妹	0	0	0	1	0	1
義経主従	0	1	0	0	0	1
《事物》						0
神社	1	1	1		1	4
不動尊	1					1
松	1				1	2
石	2	1			2	5
海	1					1
山	2	1			1	4
寺	1					1
岩	2	12	3	6	2	25
岬	1	5	3			9
櫂	1					1
証文	1					1
歌謡	1					1
岩場	1					1
岩屋	1					1
島	1					1

	道南地区	日本海沿岸	太平洋沿岸	知床半島沿岸	内陸部	合計
川	1					1
土地		1				1
小山		1				1
森		1				1
徳利		1	1			2
野原		1				1
洞窟		1				1
墓		1				1
花		2	1			3
蛇		1				1
救助		1				1
地名		1	1			2
社		1				1
燕		1				1
料理		1				1
メノコ		1				1
場所		1	3	1	1	6
椀			1			1
岩山			1			1
村長			1			1
浄瑠璃			1			1
木			3			3
巻物			1			1

（一七）

	道南地区	日本海沿岸	太平洋沿岸	知床半島沿岸	内陸部	合計
鳥			1			1
住居			1			1
峠			1		1	2
宝			1		2	3
魚釣り			1			1
館			2			2

（一八）

	道南地区	日本海沿岸	太平洋沿岸	知床半島沿岸	内陸部	合計
跡			1		1	2
船			1			1
橋			1		3	4
土俵			1			1
丘					1	1
子孫					1	1

謝辞

本稿は日本口承文芸学会三十周年記念叢書第三巻『シリーズことばの世界はなす』の原稿を増補したものです。北海道口承文芸研究会会員、中村拓人、鈴木繕将両氏には大変お世話になりました。また、本稿は北星学園大学の二〇〇五年度特別研究費による研究の一部です。

注

（1）「北海道民話の研究」として本学文学部紀要に（その1～4）まで論説・研究ノートとして掲載して来た。本号から「北海道の民間説話の研究（その5）」とシリーズ・テーマを変更した。「民話」という概念が「創作活動」も含めていることから日本民俗学会では「口承文芸」という用語を使用している。私は今まで「北海道の民話の研究」として作業を進めてきた。しかし、例えば近世文書の記事を伝説として編集者の創作をも含めて今日まで伝承されている伝説がある。これらの事例は口承ではなく記録伝承（書承）である。また、神話・昔話から開拓談までの語り話を含めると「文芸」というよりも「説話」という用語が妥当であろうと考えるようになった。従って、口承された話、記録等の話を研究対象とし、内容も「文芸」という概念よりも広げて考える方が妥当であると考えるようになった。以上の理由から本号から「民間説話」という用語を使用するようにした。

（2）次のように、少年時代に焦点を当てた源義経が、義務教育初期の「小学国語読本・唱歌」の中に登場している。事例・文部省「四　ウシワカマル」『尋常小学国語読本巻二』（国定三期　大正七年度から使用）、文部省「十三　牛若丸」『小学国語読本巻三』（国定四期　昭和八年から使用）、文部省「一〇　牛若丸」『新訂尋常小学唱歌第一学年用』（昭和七年三月）。

（3）日本にも英雄不死伝説は次のようにたくさんある。源為朝（琉球）、以仁王（福島・新潟）、平維盛（紀伊）、俊寛（佐賀）、護良親王（岩手）、源範頼（神奈川）、安徳天皇（九州）、明智光秀（岐阜）、石田三成（秋田），豊臣秀頼（鹿児島）、大塩平八郎（天草・清・ヨーロッパ）、西郷南州（ロシア）等で（余生）を過ごしたという伝説である。

（4）森村宗冬二〇〇五「六回も蘇った義経」『義経伝説と日本人』一二頁

から引用

（5）膝英勝一七六八『通俗義経蝦夷軍談』を読み下した梅原達治資料を参考にした。一九九七『札幌大学総合論叢[資料紹介]第三号抜刷』

（6）小谷部全一郎（一八六七・一二・二三―一九四一・三・一二）と北海道との関係については、次の著書が参考になる。小谷部全一郎、訳生田俊彦一九九一「第三章蝦夷の島で」『ジャパニーズ・ロビンソン・クルーソー』皆美社、一九九四「二、幻の『北海道旧土人救育会円山学園』設立計画」『新札幌市史　第三巻（通史三）』五〇七―五二五頁、川鰭定明　二〇〇〇「虻田学園の創立者・小谷部全一郎」『ウタリとともに　白井柳治郎をめぐる人々』一～四七一頁、浦田広胖一九九〇「アイヌ教育と義経伝説―小谷部全一郎の軌跡」『明治のアイヌ・インデアン認識―明治期の知識人と先住民族―』（民族問題叢書1）自刊四二―九五頁

（7）佐々木勝三・樋口忠次郎・大町北造・横田正二には、次のような編著がある。『源義経蝦夷亡命追跡の記』上巻一九七〇、下巻一九七二内外緑地出版部、一九七七『成吉思汗は源義経―義経は生きていた―』勁文社その他

（8）次のような著書が参考になる。深瀬春一　一九三六『蝦夷地に於ける和人伝説攷』、高倉新一郎一九四六「義経の蝦夷渡来談」『北方風物』一巻一一号「昔噺の巻」北日本社、佐藤直太郎一九五四「釧路地方に於ける義経の伝説」一九六一『佐藤直太郎郷土研究論文集』釧路市役所、吉田巌一九二五「『成吉思汗は源義経也』の論駁に就いて」『アイヌ史資料集第二期第一巻』北海道出版企画センター一七七―一八五頁、菊地勇夫一九八二「義経『蝦夷征伐』物語の生誕と機能」『史苑』四二巻一・二号立教大学史学会、須藤隆仙一九五九「義経渡道と寺院」『北海道仏教史の諸研究・解信』第一九号自刊、平山裕人一九九六「アイヌの義経伝承」『アイヌ史を見つめて』四三三北海道出版企画センター

（9）国史講習会編　一九二五『成吉思汗は源義経に非ず』雄山閣には次の諸氏が小谷部説批判をしている。大森金五郎、金田一京助、箭内亘、沼田頼輔、臨風生、中村久四郎、藤村作、中島利一郎、藤澤衛彦、三宅雪嶺、梅澤和軒、高桑駒吉、関壮二、鳥居龍蔵、志筑祥、坂本蠡舟等が論駁している。例えば、金田一京助は「英雄不死伝説の見地から」という論題で次のように論じている。「小谷部氏の場合は・・・まづ結論を信じて、此に合ふ都合の好い事実を都合の好いやうに解釈して採用し、若し都合の悪い様な事実などは、始から棄てゝ省みられではないかと疑はれる。（中略）小谷部氏の義経論は小谷部氏の『義経信仰』の告白に外ならない。」（三三、四頁）中島利一郎は「源義経は成吉思汗にあらず」「再び小谷部氏の『成吉思汗は源義経也』を評す」「三度成吉思汗は源義経也を評す」の論文を掲載している。後日、島津久基は一九三五『義経伝説と文学』明治書院七六八頁の大著を著している。

（10）阿部敏夫　二〇〇六「雪中のSL義経号を救ったしづか（静）号の不思議とは？」『北海道の不思議事典』新人物往来社　七二、三頁を参照する。現在、義経号は、「JR西日本交通科学館（大阪）」、しづか号は、（正式呼称）「小樽交通記念館（北海道）」、弁慶号「鉄道博物館（埼玉）」に保存・管理されている。

引用・主な参考文献

・金田一京助　一九一四　『東亜之光』
・満岡伸一　一九二四　『アイヌの足跡』　三好商店
・小谷部全一郎　一九二四　『成吉思汗ハ源義経也』　冨山房
・国史講習会編　一九二五　『成吉思汗非源義経』　雄山閣
・島津久基　一九三五　『義経伝説と文学』　大学堂書店
・深瀬春一　一九三六　『改版蝦夷地における和人伝説攷』　間瀬印刷所出版部
・北海道庁　一九四〇　『北海道の口碑伝説』　日本教育出版社
・岩崎克己　一九四三　『義経入夷渡満説書誌』自刊
・高倉新一郎　一九四六　『北方風物』一―一一「昔噺の巻」　北日本社
・更科源蔵・渡辺茂　一九五二　『北海道の伝説』　柏葉書院
・須藤隆仙　一九五九　『北海道仏教史の諸研究・解信』　自刊
・佐々木勝三・樋口忠次郎・大町北造　一九七二　『義経は生きていた（一九）』

源義経蝦夷亡命追跡の記・下巻』　内外緑地（株）出版部
・歴史読本　一九七八　『特集英雄不死伝説』　新人物往来社
・菊地勇夫　一九八二　『史苑』四二―一・二　立教大学史学会
・斜里町立博物館協力会　一九八四　『知床半島西岸の地名と伝説（郷土学習シリーズ第6集）』
・本多貢　一九八六　『なぜ義経がジンギスカンになるのか』
・平山裕人　一九九六　『アイヌ史を見つめて』　北海道出版企画センター
・本別町町史編さん委員会　二〇〇二　『本別町生活文化誌』
・阿部敏夫編著　二〇〇二　『北海道義経伝説序説』　響文社
・五味文彦　二〇〇四　『源義経』　岩波書店
・森村宗冬　二〇〇五　『義経伝説と日本人』
・日本口承文芸学会編　二〇〇七　『シリーズことばの世界　第三巻　はなす』　三弥生井書店
・文部省　『新訂尋常小学唱歌』　大日本図書株式会社（復刻版）日本音楽教育センター
・古田東朔編　一九七八―　『小学読本便覧（第一・二・三・六・七・八巻）』　武蔵野書院

追記

小谷部全一郎の義経ジンギスカン説を今後論究するために、小谷部全一郎の著作を（注（6）を除く）掲載しておく。

・一九〇九（明治四二）　『北海道旧土人保護ニ関スル建議』
・一九一一（明治四四）　編・フレデリック・スタール　『アイヌ謎集』　鶴岡信治
・一九二四（大正一三）　『成吉思汗ハ源義経也』　冨山房
・一九二五（大正一四）　『成吉思汗ハ源義経也　著述の動機と再論（反対論者に答ふ）』　冨山房
・一九二九（昭和四）　『日本及日本国民之起原』　厚生閣書店
・一九三〇（昭和五）　『静御前之生涯』　厚生閣書店
・一九三三（昭和八）　『満洲と源九郎義経』　厚生閣書店
・一九三五（昭和一〇）　『義経と満洲』　厚生閣書店
・一九三八（昭和一三）　述・『純日本婦人の俤』　厚生閣書肆
・一九八六（昭和六一）　『日本及日本国民の起原・日本人は希伯来人也』　炎書房
・一九九一（平成三）　『日本人のルーツはユダヤ人だ―古代日本建国の真相―』　たま出版
・一九九五（平成七）　『豆本7・明治年間の虻田とアイヌの人びと―小谷全一郎の記録から―』　北海道開拓記念館（第一〇六回テーマ展）

（二〇）

［Abstract］

A Study of Hokkaido Folk Tales No. 5 : A Study of the Legend of Yoshitsune in Hokkaido

Toshio ABE

The Legend of Yoshitsune has been passed down from generation to generation by word of mouth in 110 areas throughout Hokkaido. The legend contains a variety of themes including the story of the break up of Yoshitsune and an Ainu girl, how he taught agriculture and fishing to the Ainu, stealing a scroll from the Ainu, the remains of the Benkei sumo wrestling site, a deed of debt, Benkei's sister and a giant serpent, and the story of the Imperial Shizuka. The diversity of this folklore is related to the background as follows. First, there was the assimilation policy of the Edo Shogunate and Meiji Restoration government administrators for indigenous Ainu people in Hokkaido, the then Ezo. Second, the legend's role (as a story for the common people) of expressing the prayer, desire and the recognition of work by the settlers who emigrated to Hokkaido after the Meiji Restoration. Third, Japan's inroads into East Asia. And last, the aim to stimulate development. Such elements have made the legend of Yoshitsune very rich in content. I believe that this legend should be orally handed down in the future not only for the political purpose of administrators but as a romance of the common people.

Key Words: Tale of Hero's Immortality, Tale of Yoshitsune's North Bound, Places Where the Yoshitsune Legend was Passed Down Orally, Tale of Yoshitsune Genghis Khan.